



東日本大震災で被災して名古屋市内に避難してきた家族と、同市と長久手市にキャンパスがある愛知淑徳大の学生団体「なごやであそび隊」は、震災直後から活動を続けている。新型コロナウイルス禍でも「等身大でできる」ことがある」と、代表の同大交流文化学部三年伊藤菜々子さん(二〇)豊川市は、子どもたちとの文通を通じた学習支援に力を入れる。

二〇二一年六月に設立。「被災地に行くことはできないが、名古屋で何かをしたい」と考えた当時の学生たちは、県被災者支援センターを通して小学生くらいまでの子どもがいる家族を募ると、福島などから来た二十五組が集まった。「名古屋を第二のふるさとに」をテーマに、遠足やクリスマス会などを年四〜五回開

⑥ 名古屋に避難の被災者と交流



子どもたちとやりとりした手紙を見つめる伊藤さん＝長久手市の愛知淑徳大長久手キャンパスで



被災した子どもたちと触れ合う学生＝名古屋市の東山動植物園で(愛知淑徳大提供)

亡くし、母親が働きに出て寂しかった経験を持つ。「子どもたちに寄り添いたい」と入部を決めた。メンバーは約二十人。心掛けることの一つは食材への配慮だ。先輩が子どもにアイスをねだられて買った後、母親に「何が入っているか分からないじゃない」と注意されたと聞いた。甲斐さんが見つけた子どももおり、親たちが慎重にならざるを得ない現状を知った。代表となった一昨年の「ちらしずしを作る会」では、使う食材と産地を事前に親にメールで確認。

「今回は、全部食べられる」と話す子どもたちの笑顔を見られたとき「純粹にうれしかった」と振り返る。

「学生さんはしっかり話を聞いて思いを酌んでくれる」。埼玉県から避難し、一三年ごろから長女(二〇)に参加するパート二原香奈子さん(四〇)は感謝を口にす

る。東山動植物園、名古屋潜水族館、工場見学…。「このまちでいっぱい思い出をつくらせて、お母さんたちも信頼関係を築く。私たち学生にとっても、ここがみんなのふるさとだと思えてくるんです」。伊藤さんは手応えを感じている。子どもの年齢も上がり、この一年半は学習支援を重視してきた。「コロナ禍もあり、子ども十一人を学生が一人ずつ受け持ち、市販の教材のコピーと返信用封筒を送ってやりとりを続ける。伊藤さんの元には昨年七月、回答と一緒に「今回は自信ある。一問も間違えてない」といいなあ」とかわいらしいイラストを添えたメッセージが返ってきた。「会えなくて寂しいけれど元気づけよう。子どもたちに居心地良く過ごしてもらっていることを考えているけど、気付いたらいつも元気をもらっています」。コロナが収まったら、子どもたちが自身の被災経験や感じていることを伝える活動を企画してみたい。「名古屋で、震災を忘れない人を増やせるかな」

(西川侑里)

子どもと文通し学習支援